

富樫 〔「勧進帳」入り〕

〔初演〕

富樫..さる昔、加賀の国安宅の関の関守は、

鎌倉殿の命に背きて判官主従を通したり。

関守はなにゆえに通せしとや？

散りゆく花は手折るものかは。

なにゆえに存じおるかと。我が名は富樫、かの関守をへこうまき仕りし者にて候。

^\これやこの、行くも帰るも別れては

知るも知らぬも逢坂の、山かくす、霞ぞ春はゆかしける

波路はるかに行く舟の、海津の浦に着きにけり

いざ通らんと旅衣、関のこなたに立ちかかる

富樫..客僧たち、この関こそは山伏を一人も通すこと

まかりならぬ。

弁慶..言語道断。かかる不祥のあるべきや。この上は力及ばず。

さらば最期の勤めをなさん。

^\それ山伏といつぱ、役の優婆塞の行義を受け
即身即仏の本体を、ここにて打ちとめ給わんこと

明王の照覧はかり難う、熊野權現の御罰当らん

こと、立ちどころに於いて疑いあるべからず、

唵阿毘羅吽欠と、数珠さらさらと押し揉んだり

富樫..ちかごろ殊勝の御覺悟。先に承り候へば、

東大寺の勧進と仰せありしが、勧進帳ご所持なき事は
あらじ。勧進帳を遊ばされ候へ。これにて聴聞仕らん。

^\元より勧進帳のあらばこそ、笈の内より

往来の巻物一巻取り出し、勧進帳と名付けつつ、
高らかにこそ読み上げけれ

富樫..勧進帳たしかに承り候。

そもそも九字の真言とは、いかなる義にや、
事ついでに問い合わせ申さん、いかにいかに。

弁慶..九字の大事は神祕にして、語り難きことなれど

疑念を晴らさんその為に、説き聞かせ申すべし。

そもそも九字の真言とは、臨兵鬪者皆陣烈在前、
神祕の法を行ひて、急急如律令と呪する時は、
陰鬼陽魔もたちどころに消え滅ぶ事、霜に煮え湯を
注ぐがごとし、まだこのほかにも修驗の道、その徳、
広大無量なり。百拜稽首、謹んで申す。

富樫..疑いは晴れ申して候。疾く疾く御通り候え。

弁慶..かたじけなく候。

へこは嬉しやと山伏も、しづしづ立つて歩まれけり

富樫..いかに、それなる強力、とまれとこそ。

へすはや我が君あやしむるは、一期の浮沈

ここなりと、各々あとへ立ちかえる

金剛杖をおつ取つて、さんざんに打擲す

「通れ」とこそは罵りぬ

方々は何故に、かほど賤しき強力に、太刀
かたなを抜き給うは、目垂れ顔の振る舞い、
臆病の至りかと皆山伏は打ち刀抜きかけて
勇みかかるる有様は、いかなる天魔鬼神も
恐れつびょうぞ見えにける

へ士卒を引き連れ閑守は、門の内へぞ

入りにける

富樫..げ 実に比類なき主従かな 主も主たり 徒も

また見事に強き御絆

陰ながら閑守は袖を濡らせり

へついに泣かぬ弁慶も、一期の涙ぞ殊勝なる
判官、御手を取り給い

へ鑑に添いし袖枕、片敷く隙も波の上、
或る時は舟に浮かび、風波に身を任せ
又或る時は山脊の、馬蹄も見えぬ雪の
中に、海少しあり夕波の立ち来る音や
須磨明石

とかく三年のほどもなくなく、いたわしやと
萎れかかりし鬼あざみ、霜に露おく
ばかりなり

富檉..一行は ほろびに向かう旅衣 何を思うて吹くや松風
富檉..のうのう、心ばかりの御酒一献、なみなみと注がせ給え。

へ人目の閑のやるせなや
ああ悟られぬこそ浮世なれ

富檉..花は紅 柳は緑 さりながら
抗うて生きるが人と申すなり

へ是なる山水の、落ちて巖に響くこそ、

鳴るは瀧の水、鳴るは瀧の水

へ鳴るは瀧の水、日は照るとも絶えずとうたり
とくとく立てや、手束弓の心許すな関守の人々
暇申してさらばよとて、笈をおつとり肩に打ちかけ、

虎の尾を踏み毒蛇の口を逃れたる心地して、

陸奥の国へぞ下りける

富檉..たなびく霞の山桜 雲のはたての春の雪

風にほどけし天つ空に 次第次第に消えにけり